
 学 会 記 事

第 246 回新潟外科集談会

日 時 平成10年 5 月 9 日 (土)
午後 1 時 30 分 ~ 午後 4 時 40 分
会 場 新潟大学医学部 有壬記念館
2 階大会議室

I. 一 般 演 題

 1) Immediate Breast Reconstruction Using
extended Latissimus Dorsi Muscle Flap
Following Subcutaneous Mastectomy
— 第 33 回ヨーロッパ外科研究会議より —

三浦 宏二 (がん検診クリニック
三浦外科)
川合 千尋 (消化器科・外科
川合クリニック)

1) 一期的乳房再建術は、患者の精神的、肉体的負担が少ない点、手技的にも容易である点、従来いわれてきたように局所再発の follow を妨げることもないことは今日明らかである点、などから、患者、外科医双方にとって二期的乳房再建術よりも優れている。

2) 80%前後を占める皮膚浸潤のない stage I, II 乳癌では、Subcutaneous Mastectomy と Radical mastectomy で局所再発に差がないことから、一期的乳房再建に有利な Subcutaneous Mastectomy を選択できる。

3) Subcutaneous Mastectomy 後のポケットに入れる組織として、広背筋弁がもつとも適していると考えられる。なぜなら、腹直筋弁よりも容易かつ安全 (合併症が少ない) であり、美的には明かに implant よりも優れているからである。腸骨上部の皮下脂肪を筋弁と同時に採取することにより、乳房の比較的小さい日本の婦人では、再建乳房の volume が不足することはまずない。

4) 残念ながら、日本では乳房再建ができる形成外科医が非常に少ないために、乳房温存の適応にならない症例にはほとんど modified radical mastectomy が行われている。しかし、この術式は一般外科医でも容易かつ安全にできて美的効果が大きい。したがって、どこの病院でもできる。

(結論)

Subcutaneous Mastectomy と皮下脂肪を加えた広背筋弁による一期的乳房再建術は、一般外科医が行っても十分な美的効果が得られる術式であり、乳房温存術の適応にならない stage I, II の乳癌患者に大きな恩恵をもたらす。

2) 女性化乳房に合併した男性乳癌の 1 例

若井 俊文・鈴木 聡
齊藤 博・小林 隆 (新潟市立荘内病院)
金田 聡・三科 武 (外科)

女性化乳房症の経過観察中に、乳癌の発生をみた 1 例を経験したので報告する。症例は 86 歳、男性。前立腺肥大症治療薬酢酸クロルマジノン (黄体ホルモン) を 27 年間服用していたが、89 年 4 月に女性化乳房が出現。98 年 1 月には右乳腺 CD 領域に径 2 cm, 弾性硬の腫瘤が認められた。乳腺腫瘤の吸引細胞診は class IV であったが、臨床的に乳癌を強く疑い、2 月 13 日手術 (Br+Ax) を施行した。組織学的には、f, t2 (25×21mm), n0, 浸潤性充実性腺管癌で、また ER, PR は陽性。免疫組織学的には、p53 は陰性で、PCNA の標識率は 1% であり、低悪性度の腫瘍と考えられた。

男性乳癌は比較的稀な疾患で、女性化乳房症の合併頻度は約 7% であるが、黄体ホルモン剤が原因と思われる女性化乳房からの発生は極めて稀である。高齢男性に女性化乳房がある時は、乳癌の合併を念頭におき注意深い経過観察による乳癌の早期発見・治療に努めなければならない。

3) 外鼠径ヘルニアと術前診断された鼠径部脂肪腫の一例

北見 智恵・神田 達夫
金子 耕司・畠山 勝義 (新潟大学第一外科)
亀山 仁史・曾川 正和
諸 久永 (同 第二外科)

症例は 66 歳の男性。一年半前より右鼠径部の膨隆を自覚。他覚的には 4×3 cm 大の柔らかな還納性腫瘤であった。外鼠径ヘルニアと診断され、併存する腹部大動脈瘤と同時手術となった。精索内に薄い線維性被膜に包まれた脂肪腫を認めた。腫瘍は深鼠径輪を通り腹膜前脂肪層に存在していたが、腹腔内へは続いていなかった。腫瘍を切除し (13×9 cm, 100 g)、鼠径管後壁の補強を行っ

た。ヘルニアの併存はなく、腹腔側からの観察でもヘルニア門は明らかではなかった。

外鼠径ヘルニア類似の症状を示した脂肪腫の一例を経験したので報告した。

4) 腎透析患者の食道手術の経験

蛭川 浩史・穂苅 市郎
篠原 博彦・豊田 精一
相馬 剛 (新潟労災病院外科)

腎透析患者では組織の脆弱性、易感染性、易出血性、水分バランスの変化等手術に対し不利な要素が多い。我々は腎透析患者に対する食道癌手術を経験した。症例は糖尿病性腎症により昭和59年より(15年間)人工透析を受けている65歳男性。gastric ca. (A) Post, O-II cT1 (M), esophageal ca. (Im, Iu) 1型, A1に対し胃粘膜切除、及び非開胸食道抜去術、頸部食道胃吻合術(anterior thoracic route)を施行した。手術では食道周囲の剥離の際に縦隔鏡を使用し、術中の止血操作を確実にを行うように努めた。また Swan-Ganz catheter を挿入し、術直後より嚴重な循環動態や水分出納、電解質の管理を行った。CVP は40~140 mmH₂O, CO は5.2~8.8 L/min であった。これらのデータをもとに透析の除水量を決定し、周術期を安全に乗り越えることができた。腎透析患者では水分バランスの小さな変化が循環動態や臨床症状の変化として現れきめ細かな管理が必要と思われた。しかし嚴重な管理により、安全に周術期を乗り越えることは可能であると考えられた。

5) upside down stomach, gastric volvulus を来した成人 Bochdalek 孔ヘルニアの2例

篠川 主・中塚 英樹
藤田みちよ・野上 仁
三間智恵子・鱈渕 勉 (南部郷総合病院)
佐藤 巖 (外科)

稀な成人 Bochdalek (以下 Bo) 孔ヘルニアの2例を報告する。

症例1: 46歳男性。平成9年12月9日左季肋部痛、嘔吐、後頸部痛で当院受診。縦隔気腫あり、横行結腸も含む食道裂孔ヘルニアと診断した。術中ヘルニア嚢を有する右側 Bo 孔ヘルニアと判断し、ヘルニア門の閉鎖とヘルニア嚢ドレナージ術を施行した。

症例2: 20歳女性。平成10年2月5日昼食後左上腹部

痛あり近医より紹介され、左 Bo 孔ヘルニアと診断しレビン管留置でヘルニアは整復したが、ヘルニア門の閉鎖と左胸腔ドレナージ術を施行した。2例とも upside down stomach, gastric volvulus を来していたが術後経過良好。

結語: 本疾患の軽症例は意外に多いとの報告もあるが、術後死亡例もあり、有症状例はヘルニア門の閉鎖術が必要である。

6) 新生児期発症の Nesidioblastosis の1治療例

山崎 哲・八木 実
飯沼 泰史・内藤万砂文
内山 昌則・岩淵 眞 (新潟大学小児外科)

症例は生後1ヶ月の女児。出生直後より低血糖症状を認め高濃度糖質輸液を開始したが改善無く精査の結果、高インスリン血症と診断。ジアゾキサイド、ステロイド投与開始するも時に低血糖を認めたため当院小児科転院。ソマトスタチン投与等の保存的治療開始したが無効のため外科治療目的に当科転科となり Nesidioblastosis として95%膵切除施行した。組織学的にび慢性型の Nesidioblastosis であった。周術期の血糖値は不安定であったが、その後空腹時血糖値80~100 mg/dl と著明に改善され退院となり、現在外来経過観察中である。

7) BCG 接種後の腋窩リンパ節炎の2例

内藤 真一・新田 幸壽 (新潟市民病院)
山崎 哲・鈴木 孝明 (小児外科)

乳幼児ではしばしば身体各部位のリンパ節腫脹が見られることが多いが、その大部分は病的なものではなく、経過観察にて軽快することが多く、細菌感染などにより切開を要するよう化膿性リンパ節炎は稀なものである。一方、BCG 接種後に所属リンパ節である腋窩リンパ節に腫脹を来してくる例があるが、これも BCG 接種後であることがはっきりしていれば自然消退することがわかっており、外科的に切開を要することはまれといわれている。今回、腋窩腫瘍を主訴に来院し、BCG 接種後であることに気づかずにリンパ節生検を行なった2例を経験したので、報告する。